やすらぎ

「歎異抄」（第二十三回）

櫟暁講述

「歎異抄」　第十二章　続き

まことに、このことわりにまよえんひとは、いかにもいかにも学問して、本願のむねをしるべきなり。経釈をよみ学すいえども、聖教の本意をこころえざる条、もっとも不便のことなり。一文不通にして、経釈のゆくじもしらざらんひとの、となえやすからんための名号におわしますゆえに、易行という。

（真宗聖典六三一頁）

お経や註釈書を読んで、知識は豊富になっているが、聖教の本意を心得ない。「本願を信じ念仏を申さば仏になる」ことが真宗の正意である。重い百科事典が電子辞書に入る時代ですが、我々は物知りになりたいのではない。たすかりたいから仏法を聴聞するのである。自分が本当に生きることができるということを聞きひらくということが聴聞するということである。

経釈のゆくじとは、教相ということ。教えの筋道。教相ははっきり知らないけれども、安心がはっきりしている。「念仏申さばたすかる」という道理を自分の身に受け止めている。称えるということは、念仏を口で称えますが、もっと深い意味を頂いて、南無阿弥陀仏という六字の言葉で自分が目覚めて生きていけるということがはっきりする。それが念仏申すということ。それがはっきりしなければ空転する。念仏は念仏だけれども、そのことを頷く信心が大事。

南無阿弥陀仏という言葉になった仏のはたらき、このことひとつで自分はたすかるのだということをはっきりして称えることができる。それが称えやすからんための名号である。

忙しいときでも、妄念妄想に妨げられるときであっても、南無阿弥陀仏の言葉が用いて私の迷いが破られる。称えやすいというのは発音ではなく、南無阿弥陀仏と申すことが私の間違えのない救いであるということをはっきりさせて頂く名号であるから易行と云う。

自分の力で悟りを開くのではなく、仏の力によって信心を獲て往生成仏ができる。そういうことを易行と云う。

（当寺ご法話抜粋要約、文責副住職　釈徹照）次回へ続く

光照寺寺報

発行所
宗教法人光照寺
〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781㈹
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji
発行人
池田孝郎

蓮如上人御影道中記
光照寺護持会総会報告
盂蘭盆会法要　八月三日(日)午前・午後　厳修

詳細は三頁
詳細は四頁
詳細は五頁

総会　佐々木玄吾師　ご法話

総会　婦人有志合唱

無碍光

―凡夫が仏になる法―

住職　池田　孝郎

この度は「柔軟心」について考えてみたい。それは私自身の頑な現在の心を見つめ、幼い時、聞いた言葉に照らし、その言葉に生きてきた青年時代、壮年時代、そして、仏法に遇い、お念仏の教に出遇って、仏語に照らされ、なお我が心の至奥の闇を内観してみようと思ったからです。

現在私は六十六才になり、つとに憶うことは、幼少の時の言葉と生きざまと、仏語の映徹を常に感じる私がここに居ることです。

柔に対する語は硬でしょう。幼い時母より、「軒より落つる雨垂れのやがては石を穿つらん」という言葉をよく聞かされて育った。それは小さな雨垂れの一滴、一滴もいつか軒下の硬い石をも穿をあける喩えです。実際に少年の頃、その様な石を見つけて、成る程と納得したことが、鮮明に脳裏にきざまれている。又、「堤防も蟻の一穴」で崩壊する。油断あるまじき、という言葉に妙に納得する自分がいた。それも、堤防すれすれまで川が溢れ、蟻の小さな穴から水がチョロチョロ流れ、やがて、ドッと堤防を破壊するとした中国の諺に由来することを、後に成人してから知った。父からは幼い時より、「百万人行かずとも我行かん、これこれを大丈夫という」という言葉を再々聞かされて育ってきた。「男の中の男とはそういうものだ」という意味で、信念を持って我が道を一人歩めと教えられた。

幼少の父母の言葉を鏡とすると「意志一貫しない自分、継続しない怠惰な自分と対峙」しなければならず、罪悪感を内にかかえた、内向的な自分に気づきつつ成長することとなった。

しかし、小学校五年生の頃、担任の男の先生が「君達は一生かけて大きな玉となれ、早く丸くして小さな玉となるな。ゴツゴツ角張った角は一生かけて丸くしろ。」の言葉が妙に私を救ってくれた。

外には豪気、内は内向的な自分が形成されていった。今でも私が内向的だといってもだれも信じない。大人になって、「柔よく剛を制す」の言葉に共感しても、「柔」になれない「頑な」な自分を、自分としなければならなかった。

事業を起した時、経営雑誌に、ある会社の社長の座右の銘に「細心大胆」とあり、経営者の必須条件の資質といわれているのに感銘し、私の座右の銘も、「細心大胆」として頂いた。しかし、「細心」では行動が起きず、「大胆」ではラフに陥る。誠に「矛盾概念」に感銘したものである。そして掲げた、自分に言い聞かせた言葉が、「清濁合せ飲む大度量」であった。身の程知らずの結果は「破れ果てた自己」であった。

念仏の教えに遇って、「自力無効」の仏語に遇い、既にして既に仏は私のために説かれていたのだと頂けた。触光柔軟の願として、本願に示されている。「光に遇う者は身心柔軟なる功徳を賜る」とあり、如来の光に遇うと示される。如来の四無量心である「慈悲喜捨」の、如来の大度量のお心、「他力回向」を、如来様から頂くことであった。私には度量もない頑なな凡夫のままに賜る世界であった。如来のお心が「柔」であった。「海の如し」、合掌。

鈴の音

「念仏者」とは、いかなる苦難があろうとも真実に向って逃げずに顔をそらさずに歩み続ける人生を送る人のことです。

真城義磨
（『あなたがあなたになる48章』）

真の依り処

今日は一日終わったけれど、嫌なことがあり不満いっぱい。明日になれば、きっと善いことがあるだろうと思うけれど、思い通りにいかないため不満は募る。そういう毎日の繰り返し。納得出来ない不平不満ばかりの私でした。

そんな私が大切な息子を亡くし、悲しみと悔しさが込み上げ、何で私がこんなめに遭わなければいけないの、どうしてどうしてとただ嘆きばかり。夜は眠れず、朝から酒を飲み、自分も死にたい死にたいと思いました。気は半狂し、身はボロボロ、くずれ落ちそうになり、頭から飲んでいたお酒も飲めなくなり、お医者の世話になる始末。こんな私ではないといくら自分に言い聞かせても不平不満ばかり。私は絶対悪くない。悪い事などしないで一生懸命働いて生きてきたのに・・・次号へ続く。

岡田ノリ子

蓮如上人御影道中記

釈恒浄

「蓮如上人さまのお通りい～」「蓮如上人さまのお通りい～」御影道中の先駆けの持つハンドマイクの声が春の北陸路に響く。

道端では待ち受けていた人や、家から駆け出して来た人達が行列の御輿に向って手を合わせている。なかには道端に座り込んで念仏を唱えているお年寄りや、遠くの畑や田んぼで農作業の手を止めて合掌する人々の姿も見える。

ここ北陸の真宗大谷派の吉崎別院で、蓮如上人のご命日の旧暦三月二十五日前後に営まれる「蓮如忌」が、今年も四月二十三日から十日間にわたり厳修された。その御忌法要のために京都の東本願寺から上人の御影（御絵像）を吉崎別院までお連れする行事が御影道中であり、宝暦二年（一七五二）から始められている。以来上人ゆかりの北陸、近江、三河などの地では春を告げる行事として、受け継がれてきたもので今回が三三五回目という。

東本願寺から蓮如上人の御影を御輿に乗せて、上人が歩かれたといわれる吉崎別院までの約二四〇キロの道程を、随行教導を始めとする宰領・供奉人と自主参加のお供の人あわせて二・三十名の人達が六泊七日間かけてお連れする御下向の旅である。このたび念願かなって道中のほんの一部ながら、鯖江から福井までの道のりをお供させて頂いた。

御影を入れた朱色の行李を黒漆塗り御輿に納め、春の花々で飾られた台車に乗せて二本の紅白の綱をみんなで引きながら歩く。下り坂では台車の後ろの綱を数人で引いてブレーキをかけながらゆっくり進む、なかには雨の日も風の日もあり、途中には車の入れない木の芽峠があり門徒に背負われて一歩一歩御影が運ばれる。

御下向は途中に七十一カ所のお立ち寄り会所があり、そのつど地元の門徒の出迎えを受ける。

「蓮如上人さまのお着き～」到着すると行李を御輿から佛前に運び、随行教導による勤行と法話が始まる。会所は真宗寺院が多いが中には門徒の家もあり、蓮如上人が実際に立ち寄られた場所とのこと。先々でお茶や食物などのお接待で元気を取り戻し「蓮如上人さまのお発ち～」の声で次の会所を目指し出発する。

「蓮如上人さま吉崎東別院にお着～き～」鐘・太鼓が打ち鳴らされるなか、予定通り二十三日の午後八時に吉崎別院の門前に御輿が到着した。暗い階段の両側には高張り提灯が並び大勢の門徒達が待ち受けており、境内も人で溢れている。上人の御影は別の御輿に移され、折からの小雨のなか若者の肩にひかれて急な四十八段の階段を一気に駆け上る。念仏が湧きあがる。独特の雰囲気のなか上人が命からがら京都から、この片田舎の吉崎に到着された当時のご苦労を憶い、おもわず感無量の涙がこぼれる。

堂内に無事架けられた御影の前で御忌法要が始まった、これから十日間　晨朝・日中・逮夜・初夜の法要が行なわれ、連日参拝の近隣門徒たちで賑うとのこと。そして五月二日の朝吉崎別院お発ち～、九日に京都本山お着き～、の御上洛道中で幕を降ろす。

この旅で出会った真宗門徒から蓮如上人との深い結びつきが感じられた。今でも蓮如さん、御文さまと近親感を持って話をしている仕草から先祖代々、更にこれからも延々と引き継がれていくであろう完全に根づいている深い信仰心があった。この頃はいわゆる真宗の事は少しは分って来ているように思えるが、本当の真宗はますます分からなくなって来ています。生活に密着した本当の真宗がこの北陸の地にも今も残されていることを感じた旅でした。

「光照寺護持会報告」

土田一冨三

平成十九年度第九回光照寺護持会総会が六月七日十時から光照寺本堂において、左記の式次第で行なわれました。当日の参加者は会員四百七十名中四十四名でした。

式次第

一、勤行
二、佛教讃歌
三、法話「通じ合う心と心」
広島県豊平道場主佐々木玄吾師
四、総会
（一）会長挨拶
（二）議長選出
（三）護持会の活動実績について
（四）護持会の収支決算について
（五）会計監査報告
（六）二十年度の活動計画について
（七）二十年度の収支予算について
（八）聞法会の紹介
（九）住職挨拶

法話は「通じ合う心と心」と題して、蓮如上人御一代記聞書第二九三条「信をえたらば、同行に、あらく物も申すまじきなり。心、和らぐべきなり。触光柔軟の願あり。また、信なければ、我になりて、詞もあらく、諍いも必ず出来するなり。あさまし、あさまし、能く能く、こころうべしと云々」と、住岡夜晃先生法語「讃嘆の詩」より、「心と心どうしても通ぜぬ心と心、人生のさびしさがそこにある。家庭の暗も、世間に生きる悲しさもここにある。凡夫の愚痴も、聖者の悲涙もそこにある。心と心み教えによって古の聖賢に通う心と心、生きる喜びがそこにある。彼はその時人生における単独孤立の淋しさから救われる。彼の悲しみが大慈悲の線に添い彼の喜びが大慈悲の廻向である時に、やがて彼の周囲には、彼と同一の道に生きる人が自然に生まれる。大心海に通う心と心、彼はその時、生きることのうれしさの本質にふれる。ああ生きることのうれしさ、ありがたさ、今日もまた我この幸になく」を題材にされたお話しを戴きました。通じ合う心と心とは信心が中心であり、仏様の心を自分に向ける事であります。信を得た人の姿は（一）求道の姿勢としては（聞法・勤行・念仏）に表われ（二）生活の姿勢としては（荒く物も申さない、心がおだやかで、和らぐと）信を獲ていない自分は自己中心で相手の心を少しも理解していない。今回の法話はまるで自分一人の為の法話である様に思い知らされました。実は私は昨年会社を退職しこれから自分のやりたい事が出来ると思っていた所、妻が骨粗鬆症による腰痛を発症した為、今迄全々経験の無い家事全般、及び妻の介護で毎日ストレスが溜まり、つい妻に大声を出して怒鳴ったりしている毎日でお互い心が何も通じていない状態でした。ある時息子がお父さんの気持ちも判るけど、お母さんの痛いと言う事もただ優しく聞いてやるだけで良いのだから聞いてやって下さいと言われた事に自分を振り返って見た時、今迄仏法を聞いて来たけれど、何を聞いて来たのか、形だけの聞法・勤行・念仏であった事をつくづく反省させられました。心が通じ合うと言う易しい様で難しい課題にチャレンジして行こうと思います。

護持会総会

総会に入り、前年度の護持会活動の実績及び、収支決算と監査結果が報告され承認されました。続いて今年度の活動計画案と収支予算案が提案され、何れも原案通り可決承認されました。

今年度の活動方針の中心、護持会の主要目的である会員相互の親睦について、今年度は十一月一日～三日に帰敬式受式を兼ねて、本山（東本願寺）に上山します。いま東本願寺では平成二十三年の聖人七五〇回御遠忌に向け本山の改修などの準備に入っています。このお待ち受け上山に皆様方と共に参りたいと思います。詳細は後日に案内しますので、多数のご参加をお願い致します。今年度の推進員の養成については北川美智雄氏が受講の予定です。

総会終了後お斎を頂きながら始めて参加された方々の自己紹介と役員三名の方の感話発表がありました。又二年目を迎えた絵解きについてはメンバー全員がそれぞれ日常の練習の成果を発揮され、充実した内容の濃い絵解き発表となりました。今後更なる練習を重ねられ、より充実される事を願います。聲明サークルのメンバーの方々は勤行を力強くひっぱってくれました。

以上の通り本年度の方針を決定し定刻通り終了致しました。今後共皆様方のご支援ご協力をお願い致します。

お盆

埼玉県にある秩父の山奥で「ジャランポン祭」という奇祭があります。別名「葬式祭」とも呼ばれ、諏訪神社の春祭りの行事として行われています。その昔疫病が流行した時、病苦に喘ぐ人々を救うため諏訪神社に人身御供を献じ悪疫を退散したことが由来とされているようです。参加する者全員が死装束を身にまとい、生きている者を死者に見立ててお葬式をあげるという、なんとも不思議なお祭りです。

不謹慎な感も受けますが、死ととなりあわせの生をいただいて生きていることを確認する祭りではないかと受け止めれば、この行事の意味もあるかなと思います。二人称、三人称の「死」をどのように受け止めていくかは、生きている我々の課題です。そして自分もいずれ死していくこの不安と怖れをどうしたらよいのかという問いかけがつきまとうことになります。その問いかけを解決するのは国でもなく、医療でもなく、如来の本願に尋ねていただきたいと思います。

本年よりお盆法要は二部制にて厳修致します。多数のご参詣をお待ちしております。

（副住職　釈　徹照）

盂蘭盆会法要

・8月3日（日）
　第一部（午前）9時30分受付
　　午前10時～11時30分まで
　第二部（午後）1時受付
　　午後1時30分～3時30分まで
・光照寺本堂にて
・勤行・法話

※準備の都合上、出席人数と午前か午後の参詣をご連絡下さい。
預骨、初盆の方は率先してお参り下さい。
また、どなたでもお参りできます。
真宗のお盆に触れて下さい。ご参詣をお待ちしてます。

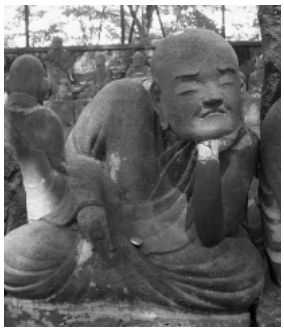
お盆参り

・7月13日から16日の期間
・8月4日から16日の期間
　（3日は除く）

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。
時間につきましては、こちらで調整して連絡させて頂きます。
ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

ひとくち 歎異抄

羅漢：「他力の信心は如何に」
「金剛堅固の信心のさだまるときを
まちえてぞ　弥陀の心光摂護して
ながく生死をへだてける」第十五章



凡夫の私の上に堅い信心決定の心が定まるのを待って、迷いを転じて、護られる世界がこの世にて与えられる。
川越喜多院の五百羅漢

総会　勤行

総会　お斎での感話

絵解きのスクリーン

恩徳讃で総会終了

―寺務所より―

◆法要のご案内

●盂蘭盆会法要
八月三日(日)、午前・午後の二部厳修。

●秋季彼岸会法要
九月二十三日(火)午後一時三十分より厳修。

●報恩講
十月二十六日(日)午前十一時より厳修。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会
毎月開催。午後一時半～四時半まで。講師は櫟暁先生。日程は当寺にお尋ね下さい。

●大経の会
七月五日(土)、九月十五日(月)、十月四日(土)午前十時～午後三時まで。お弁当持参して下さい。

●我聞の会
七月二十二日(火)、九月五日(金)、十月二十一日(火)午後二時～四時まで。講師は住職。

●微風学舎　初公開
毎月一回。午後七時～九時。於本堂。担当副住職。日程はHP参照又はお尋ねください。

●さいたま親鸞講座
午後二時～四時まで。会場は大宮川鍋ビル。日程は当寺にお尋ね下さい。

●真宗のつどい
会場は埼玉県内の寺院。ご参加の際はお寺にご連絡下さい。

●お願い
ご自宅で法事の際は駐車場をご用意下さい。宜しくお願いします。

◆敬弔
渋谷恵美子　様
平成二十年四月二十二日命終
九四歳
光照寺の推進員である渋谷さんが浄土へ還帰されました。
生前のご功労を偲び、念仏合掌して哀悼の意を表します。

大鏡池面に萌えし若葉かな　吉沢　光昭

やはらかく行楽止めし春の雨
急旋回腹のまぶしきつばめかな　西木　順子

節分草卵塔のみが残りおり
ビルに重なる直線の影新社員
ゆるゆると畑を打ちおれば鯉のぼり　花岡　要

木洩日を更にちらしぬ若楓
片みちは歩いて春を惜みけり　布施　毅夫

代掻きや新築家屋の鋤きこまる
春灯や君と語りし旅のうた
春嵐ビニール袋の浮遊する
鉄線や垣根を占めるしたり顔　山田　恒

引き潮に取り残された貝一つ
脱け殻に喜怒哀楽がこぼれてる　釈　義深

団十郎だけでは舞台廻せない
馬鹿になり舞台を廻す馬の足
此れ以上馬鹿にはなれぬ馬の足
（読人不詳）

みほとけに心こめたるお茶もらう
人の心の有難きかな
亡き人に新茶を供える朝ありて高き香に心なごめり　田中　徳子

贈られしカーネーションの花の前
ガレキの山の被災地を想う
初孫の兆しを聞きて店に行き小さき初着手に取りてみる　赤秀　品枝

コンサート終りて茶房に余韻あり
瞼が促える水芭蕉の群
蒲公英の咲き乱れいる配流の浜見
真堂に鶯の啼く
朝練へ早出の孫が玄関の鏡に向いて気合を入るる
隣国の軍事パレード恐ろしや赤の広場に一糸乱れず　布施　毅夫

鋸で棚板きりし父の背を春の陽ざしはあわくつつみし
八十白髪頭の巻き爪の父の髪きる
硬いツメきる　篠原　潤子

花岡　要　画

梵鐘

元気で前向きに生きられることに感謝したい。
人生の先輩の苦労が、身にしみて解るようになった。視力、聴力、筋力、記憶力等々、皆ことごとく低下して、思うようにならない。さっと立って、やりたいことが出来ない。年中さがしもので忙しい今、手にもっていた鍵が無い、さがしつかれて、予備のを取りに行くと、チャンと定位置に掛っている、メガネが無い、ケースに入れた記憶が無いのに、入っている。頭で考えるより先に手が勝手に動く、それは良い方で、物の置き場所を変えると大変なことになる。場所を変えたことはおぼえているが、その場所を忘れている。さがし当てると、どうしてそこに置いたのかも憶えているが、肝賢な時に憶い出せない。それでもまあ、健康で、好きなことをする為には自分の足で行けると感謝して、明るい笑顔を忘れずに。

釋尼民徳